

書評

肖江楽著

『英和对訳袖珍辞書』の研究

常盤 智子

一

本書は幕末期に幕府の研究機関である洋書調所から刊行され、本格的な英和辞書の嚆矢といわれる『英和对訳袖珍辞書』(『Pocket Dictionary of the English and Japanese Language』以下同系統のものを含めて「袖珍」と略する場合がある)についての研究書である。著者が二〇一七年十一月に立教大学文学研究科に提出した博士論文『英和对訳袖珍辞書の研究』に「大幅に加筆修正を行い、新たな論文を付け加えた(二七一頁)」ものとなっている。

『袖珍』は一八六二年に初版刊行後、一八六六、一八六七年に改訂増補され、一八六九年に第三版相当の『改正増補和訳英辞書』(『薩摩辞書』ともいわれる)、一八七二年第四版相当の『大正増補和訳英辞林』と同系統の複数の辞書の存在が知られており、幕末から明治にかけての重要資料の一

つである。また、近年、初版と再版の原稿の一部が発見され、再注目されている資料でもある。

二

まず、本書の内容・構成を示すために、目次の章部分を掲げると、以下の通りである。

序章 近代日本初の本格的な英和辞書

第1章 『英和对訳袖珍辞書』

第2章 原稿から刊行へ

第3章 初版の刊行

第4章 再版原稿から刊行へ

第5章 初版と再版との比較

第6章 第3版―『改正増補和訳英辞書』

第7章 第4版―『大正増補和訳英辞林』

第8章 『英和对訳袖珍辞書』の周辺資料

研究回顧と課題

第1章から第7章については、著者の既発表の論文や学会発表のレジュメを再構成したものとなっており、全体としては、『袖珍』各版の継承という観点から第1章から第6章までが配され、第7章および、各章

で、関連する周辺資料からの影響を編み込みながら論述するといった構成になっている。

著者は、序章で「第3節 研究目的と構成」と「第4節 研究方法及び意義」を設け、そこに下位項目を記してこの点を整理しており、ここから構成や方法論を自覚的に位置づけるといふ意図が読み取れる。

第8章の最後には本書で述べた各資料の影響関係を図(二六四頁)にまとめており、著者の辞書研究への目配りや関係性を知る上で、大変興味深い図となっている。

なお、序章で「研究方法」(一三〇―一五頁)とされている箇所はどちらかというところ「研究の構成」の内容に近く、「研究目的」(一一―一三頁)とされている箇所は「研究意義」(二五頁)との違いが見出しにくいように思われた。また、序章と第8章との対応関係が明確に示されると、本書がより活用され易くなると感じた。

三

以下、本題となる内容についてみていこう。

各章ごとの内容については、著者自身に

よるまとめが、本書一三〜一五頁に付されているため、ここでは、著者が「重点を置いて分析と考察を進める(一一頁)」とする五つの項目(以下の①から⑤の項目は本書からの引用)を利用し、本書を紹介しつつ評者からもコメントを加えることとする。

### ①辞書の成立(『英和对訳袖珍辞書』とメドハースト『英華字典』)

一つ目は、副題にもあるとおり、『袖珍』の初版と再版の成立に際しての、メドハースト『英華字典』との関与についての分析と考察である。

この点については、第1章、第3章を中心に論じられている。

『袖珍』の成立は、初版、再版の原稿の発見以後、三好彰氏や櫻井豪人氏らによって、詳細な再検討が加えられてきたが、先行研究では、蘭学関係の資料の検討が中心であり、英語関連の資料については詳細な検討は十分ではなかった。

著者はこの点に関して、ロプシャイト(ロプシャイトとされる場合もある。以下、著者に従う)から堀達之助(初版の主任編

者)へメドハーストの辞書類の寄贈があったという先行研究を押さえた上で、原稿の一部とメドハースト『英華字典』との比較を詳細に行い、メドハースト『英華字典』との関連や、改訂作業の中心人物となった堀達之助の編集方針を実証した。単に見出し語から訳語を抜き出すというだけでなく、類義語の訳語なども検討した上で利用しているという手法にも注目し、『袖珍』の研究における新しい成果を得たといえよう。

また、先行研究で指摘されている当該期の辞書の訳語の在り方「句から語への変化」(評者注：見出し語の訳語が「○○すること」というような説明ではなく、一つの「語」として言い換えられるように見えたこと)への関与も示唆している。発見された原稿は全体の一部ではあるものの、訳語の作成に際して「語」としてメドハーストの『英華字典』が利用されたということになると、それは単なる引き写しと解釈すべきか、英語の理解や漢語の定着があったとみていくのか、あるいはその割合や程度はどのようであったか、など今後の研究の進展が楽しみなどところである。

### ②訳語の改良(『英和对訳袖珍辞書』初版と再版との比較をめぐって)

二つ目は、こちらも副題にあるように、初版と再版についての考察である。

本書の中では、第3章、第4章で論じられている。

各版の継承関係という意味からは次項③と連続している問題であるが、項目に「訳語の改良」と掲げているのは、『袖珍』の改版実態として、初版と再版の間には見出し語数の変化はないが訳語の校正箇所が約八〇〇箇所あるという点で、次項③と區別して項目を立てたものと解釈した。

「訳語がどのように改編されていったのか、筆写独自で作成したデータに基づいて検証することにした。このオリジナルなデータ(初版と異なる語彙リスト)は本書において中核をなすものである(十二頁)」とあるように、著者も力を入れて分析・考察をした部分であることが窺える。

具体的な訳語を同時期の辞書類と比較することによって、参照されるものの軸足が、蘭英辞書から英英辞書(ウエブスター)へと移る指摘は重要である。

### ③新たな見出しの増加と削除(第3版・第4版(即ち『薩摩辞書』))

三つ目は、第三版、と第四版に相当する資料(『改正増補和訳英辞書』『和訳英辞林』、両者ともに『薩摩辞書』の別名あり)の見出し語の変化についての考察である。本書の中では、第5章、第6章に相当する部分と思われる。

著者は前項②に引き続き、第三版から第四版までの各版の状況をデータにして論じている(九八頁注(2)、一〇八頁などに、オリジナルデータを作成している旨の言及がある)。各版の継承関係を明らかにするための基礎研究としての異同データの体系的調査は貴重である。

その中でも、一三一頁の「表1」は、全体の流れをつかむ上で重要なものとなっている。先に少し触れたが、初版を承けて、項目数には変化はないが校正箇所が非常に多い再版に加え、比較的校正箇所の少ない第三版、さらなる増訂をした第四版の位置づけなど、客観的な数値の語ることがらは小さくない。

また、単に数値を捉えるだけでなく、第三版に追加された全例の掲載(一〇八―

一九頁)と第四版の増補された見出し語とロプシャイト『英華字典』『附音挿図英和字彙』との比較表(二四一―一六七頁)は力作で、『袖珍』の影響の大きさを実証したものとなっている。分析・考察については今後に託される部分も大きいですが、まずは基礎データの整備があつてこそのものである。これらのデータは、今後公開される予定ということである(六九頁注(4)、一六九頁注(2))。『袖珍』研究や幕末・明治期の辞書研究への大きな貢献となるだろう。

今後、『薩摩辞書』(本書では『袖珍』第三版)の系統と言われる『稟准和訳英和辞書』、『和訳英語聯珠』、『広益英倭辞典』などとの関連を検討していくことがあれば、比較の基準となるデータになってくることも期待される。

なお、評者の読み落としの可能性があるが、再版は刊行が三刷までであり、本書で扱われた「再版」がどの刷なのか、確信が持てなかった。二頁、及び十六頁注(3)に「早稲田大学古典籍データベース」を底本としたという記述を元に検索したところ、当該のものが複数あり、特定することがで

きなかったためである。継承関係を論じる上では特に重要な情報であるため、分かりやすい記載があればと感じた。

もう一つ、資料等の名称の統一という点について記しておきたい。例えば、『袖珍』第三版に当たる『改正増補和訳英辞書』について、一二二頁の表で「『薩摩辞書』1869」とし、一二三頁の表では「薩摩辞書(初版)」とするなどの類である。二頁に関連の一覧表はあるものの、混乱を招かない記述が有益であろう。

### ④訳語の漂流(『英和对訳袖珍辞書』とロプシャイト『英華字典』)

評者にはこの四つ目の項目の「漂流」というニュアンスが正確に理解できていないかもしれないのだが、著者の説明(一二頁―一三頁)から考えると、この箇所は、同時期のミッション関連の宣教師にまつわる問題について扱った部分と理解した。副題にはロプシャイトの『英華字典』のみが記されているが、評者の解釈で差し支えなければ、本書の中では、主に、第2章、第5章、第7章の一部が相当する(宣教師や出版地等との関連については、これ以外の章

にも関連記述が散見される)。

具体的な記述としては、『袖珍』の書き込み注目し、それをカシヨンやロニーではなくパジェスのものと特定するために、対象者のローマ字綴りに注目した部分(第2章)や、美華書院で取り扱っている出版物の影響関係(第5章)、交流関係や蔵書の参照の可能性などを指摘する部分(第7章ほか)など、資料の背景への目配りと探求が新たな発見へつながっていく貴重な指摘がみられた。

当該期の英字が、宣教師の語学学習の成果をどのように利用していったのか、どう咀嚼していったのか、という重要な問題について、新しい事象が追加された。

### ⑤近代新漢語(「日中語彙交流の視点から見る近代新漢語」)

五つ目は、幕末・明治初期の漢語を題材とし、日本語と中国語の影響関係に着目した内容で、主に本書の第7章に当たる部分に相当すると思われる。

第7章(1)では『袖珍』初版とロブシャイトの『英華字典』の関係を訳語の継承関係から見えていくという内容で、『袖珍』

初版の影響を承けた可能性のある漢語の一覧や、そうでない可能性のある漢語一覧がまとめられている。漢語に注目しつつ、辞書間の影響関係について、重要なデータを提示している。

第7章(2)では、メドハーストの『英和和英語彙』の成立事情について月の名称に「グワツ/クワツ」が混在している状況などを各種資料と比較している。当時の日本語学習の背景に節用集の影響があったという指摘は、木村一氏が指摘している『和英語林集成』と『雅俗幼学新書』との関連性が思い起こされ、興味深く感じた。

第7章(3)では、近代新漢語という観点から、英華辞典を通した語彙の影響が論じられている。

検討に際し、著者は左記のA〜Cの分類に即して、漢語を抽出し、Aにあたるものとして「崇拜」、Bにあたるものとして「眼球」という語を検討している。

古典にある語

C 我が国で新たに造られた語

「崇拜」については、読みが確定しない状況「ソウハイ」から「スウハイ」へと固定する時期についての検討、「認識」は白話語彙としての意味合いがメドハーストの訳語を通して影響を及ぼしたこと、学術用語としての日本での使用が中国再輸入されたことについての検討、そして、「眼球」は解体新書の翻訳を通して和製漢語として定着する様子を、多様な資料から具体的に示している。

各項目の検討に際してはオランダ語辞書、医学書、新聞記事など幅広い資料を用いている。また、第7章に限らないが、中国語のデータベースの使用や、中国語の白話語彙などの考察は著者の強みを生かしたアプローチだといえるだろう。

なお、検討の軸となるA〜Cの分類については、二一八頁によると、森岡健二編著(一九六九)『近代語の成立 明治期語彙編』に拠ることが示されており、二六〇頁では森岡健二編著(一九九一)『改訂近代語の成立 語彙編』に拠るものとされている。

A 中国の翻訳書に用いた語を襲用した語

B 日本で選定したもので典拠が中国の

る。後者は前者の改訂版にあたるものではあるが、内容に若干の異なりがあることは当該書籍の「序」に記されている通りである。参照頁が不明であるため、以下は評者の推測となるが、著者の指摘する分類についての記載が前者の第十四章に該当するのであれば、後者にはその記載はない（また、前者の第十四章は磯貝俊枝氏の論考に基づくことされる）。先行研究を明確に押さえて考察を積み上げる必要性を確認しておきたい。

#### 四

以上、著者の設定した五つの観点から、本書の内容を辿った。本書が幕末・明治という時代や、欧米・中国・日本という場面に配りしつづ、実証的な立場に立ち、『袖珍』および当該期の日本語研究に一石を投じた著作であるということについて述べた。

何よりも、日本語を母語としない著者が、この資料に真摯に取り組み、中国語という自身の強みを生かしながら、限られた期間（既発表部分の発表時期は二〇一六年から二〇二〇年とある）で大きな成果を得て、この一書をまとめられたことは驚くべきこ

とである。著者の多大な努力と研究成果に深い敬意を表したい。本書の出版を再出発点として、著者および学界の『袖珍』研究や幕末明治期の辞書研究がさらに深まることを願う。

評者の力不足から著者の意図を十分に汲み取れなかった箇所もあるかと思う。大方のこの批正を仰ぐ次第である。

武蔵野書院刊 二〇二一年一月二〇日  
（とまきわ ともこ）白百合女子大学教授

大木志門著

『徳田秋聲と「文学」可能性としての小説家』

中山 弘 明

本書に言及もある秋聲研究者の榎本隆司は評者の師の一人だが、その早稲田での最終講義は「秋聲遺響」（一九九九）と題されたものであった。徳田秋聲の影響圏として川端はもとより、古井由吉や中上健次にまで話は及び、大杉重男『小説家の起源 徳田秋聲論』（講談社 二〇〇〇）の刊行

と前後して、秋聲に新たな光が投げられたのを記憶している。本書がこたわるのも「小説家秋聲」だ。「文学者」ではない。

むろんここに、漱石に「フィロソフィーがない」作家と名指しされた秋聲の独自性もある。大木氏の最初の著書『徳田秋聲の昭和 更新される「自然主義」』（立教大学出版会 二〇一六）の「おわりに」を読むと、筆者の秋聲に対するスタンスが明示されている。そこで漱石は「文学者」としては「偉い」かもしれぬが、「作家」としては紅葉だとする秋聲の発言が冒頭に引かれ、「小説を書くこと」で「生活していくことの尊さ」、「小説を書き続けることの倫理」こそが第一の特質とする姿勢が堅持されているのだ。正宗白鳥との諍いの中で発した「商売の邪魔をすることは控へていただきたい」といった言葉にも筆者は着目している。即ち「研究」「芸術」という「高み」からではなく、時に「通俗小説」を書き、「代作」も辞さず、世間と「折り合いを付け」て書くことの「倫理」とでも言ったものか。こうした側面は、「芸術」としての「創造性」にのみ力点を置きがちの文学研究にあって、時に軽視されたものだが、



秋聲の持つ「可能性の種子」は、その後の作家達に確実に「散種」されていったことは注目されてよい。

このように、本書の第一の特質は、副題「可能性としての小説家」の中に集約されていると見ることが出来る。例えば筆者は、前著の「昭和」に対して、「明治」篇を意識していたようである。確かに明治期を扱った論が多くを占めることは確かだ。しかしそうはならなかった。問題は「時代」ではなかったとも「はじめに」にはある。それでは何なのか。秋聲の旧蔵原稿の調査、関係者からの聞き取り、テキスト論的アプローチ、比較文学的視座から、「文化資源」論まで、扱う方法は多岐に及ぶ。それが秋聲の小説家としての「可能性」であることは認めつつも、前著に比して凝縮性に乏しいという恨みはやはり残った。この書評では、時に前著も召喚させながら、むしろその「可能性」について、出来るだけ多角的に検討してみたい。

まずは本書の概要をおおまかに辿っておく。全体は三部よりなる。一部は紅葉門下時代の秋聲の動向を追跡した論である。第一章は同門の長田秋濤が下訳したものに、

紅葉に代わって秋聲が文飾を添えることで作品とした『ノートルダム・ド・パリ』の翻訳「鐘楼守」についての秋聲旧蔵資料の分析である。第二章は、やはり紅葉から原稿を譲り受けて執筆された新聞雑報「臍脂虎」の検討を通じて、秋聲の「家庭小説」へのアクセスが論じられている。この二つの章で扱われているのは、紅葉門下の「共作」問題と云ってよい。続く第三章は、作品「光を追うて」などに登場する、秋聲の初恋の人とおぼしき女性の遺族の探査と聞き取りを通じて、やはり明治三〇年代の秋聲の、「家庭小説」の女性造型が論じられていく。第四章では、紅葉門下が小説を寄せた作品集「換葉篇」の分析を通じて、風葉、鏡花、秋聲の中から自身を題材とする所謂「自己表象テキスト」（日比嘉高）が立ち上がってくるプロセスを、主に「ニーチェ主義」について時代的側面から追跡したもの。いずれも慎重な手続きを踏まえ、時代相を浮き彫りにした好論である。ここには紅葉門下という従来ネガティブに考えられがちであった（初期秋聲）の中に、「可能性の種子」を読み取ろうとする意図が明瞭に伝わってくる。

二部は自然主義時代の秋聲。ここで一部と二部を架橋するコンセプトが、「自己表象テキスト」の問題である。五章、六章はジュネットの語り論を踏まえた明治三〇年代から四〇年代の「写生」派との対抗的關係の中で、「自己」を語る表現主体が編成されてくる有り様を、渡部直己、紅野謙介、金子明雄、大杉重男、永井聖剛の諸論の中から浮かび上がらせる。そして七章は、再び時代相に戻る。鏡花と秋聲は、文学史的には対極的な存在だが、日露戦後の〈死〉の表象という側面ではむしろ共振する問題を内包している。紅葉門下を始発点として、モデル小説へ接近した様相が精査され、〈お化〉を出すか否かが両者を分かつ結節点に過ぎない。八章はより実証的な論である。小説『黴』には、新聞連載の中から単行本化の過程で脱落した一回が存在する。これをめぐって従来は、長男徳田一穂への配慮に発した家庭的問題とする意見、さらには単純な校正ミスという意見が支配的であった。著者はその六八回に現れるアーヴィング「リップ・ヴァン・ウィンクル」の存在に注目する。ここには「リップ」をプレテキストとみなされることへの秋聲の周到な

用心と隠蔽の姿勢があるという。花袋の『蒲団』が、プレテクストとしてハウプトマン、イブセン、ゾーデルマンなど西洋文学の存在を示唆することで、その価値を高めたのに反して、秋聲のねらいは、むしろそれらの痕跡を隠すことで、西洋文学の影響圏から離脱した「自然主義」を仮構したというのが筆者の狙いである。大いに議論を呼ぶ仮説といつてよい。

第三部は一転して「文化資源」の問題としての「文学館運動」が焦点化される。九章は日本における「文学館運動」の始点とも言える島崎藤村と「藤村記念堂」、さらに昭和九年の「文芸懇話会」の事業として知られる「物故文芸家遺品展覧会」が、文学者を顕彰しその資料を保管・顕示する戦後へ向けての出発であったとする論考である。また一〇章では、こうした作家の居宅を保存、展示するアーカイブの流れを、戦前の子規庵や漱石山房の中に辿ったもので、芸芸員として「文学館」に勤務した筆者ならではの視点である。こうした「文学館運動」論、「文化資源」論については、今後さらに論を重ねる計画が本書の中にも仄めかされており、それを待ちたい。

このように概観すると、本書の視座は多岐に亘ることは明らかだが、強いて絞れば「代作」「共作」といった作品のオリジナリティをめぐる問題、「自己表象」に関する事実とテクストの問題、そして「文学顕彰」についての文学の制度性の問題という三点になるか。ここでは、それぞれ私見を加えながら論じていこう。作家三島霜川が代作者としても著名であったように、「代作」「共作」の問題は、長く紅葉門下のネガティブな側面として語られがちであったが、中丸宣明がこうした文学を産出する

「共同作業」の磁場を江戸期に探った如く、問題はもう少し長いスパンで継続的に検討される必要がある。一見無関係なように見えながら、第一部の視点と、三部の「作家顕彰」の問題意識は明らかに通底する。明治三〇年代前後に、例えば「個人全集」という書物のスタイルが登場することは本書にも言及があるが、一葉や透谷といった夭折作家の遺稿をまとめ、一種の「天才」として世に送り出していく制度の確立と、「代作」「共作」といった行為が負の価値観で語られていく文脈は、歴史的な視野で踏み込んだ分析が必要だろう。例え

ば「個人全集」と双幅的な書物として「遺稿集」という、江戸期の漢詩人以来の水脈がある。「代作」「共作」という磁場も、句会のような視点を導入するとより自然に繋がる。その意味で秋濤が下訳を行い、それに秋聲が文飾して、紅葉の名で刊行された『鐘樓守』は、こうした磁場が自然な文学営為として存在した事実を明らかにするものとして興味深い。

そして「小説のオリジナリティ」をめぐる議論が、第二部の「自己表象」の問題に流れ込む。ここには樗牛、梁川らの「ニイチエ主義」があることは、近年木村洋『文学熱の時代 慷慨から煩悶へ』（名古屋大学出版会 二〇一五）などの諸論で説明されつつある。本書はそれを踏まえ、ニイチエ、イブセンらの移入によって、旧道德の破壊が文壇のトレンドとなり、その中で、所謂「煩悶の足りない作家」として紅葉の存在が後景に退いていく世代交代が、作品集『換葉篇』の中に追跡された好論である。さて問題は五章、六章ということになるだろうか。ここで大きく論じられるのが先の「自己表象」問題である。日比嘉高、山口直孝らの仕事を通じて、我々はようやく

拭えないだろう。

「私小説」という、中村光夫の『蒲団』史観以来、「自身を描く文学」に付与されたネガティブな評価から脱しつつある。ここでは因果律や筋に還元されない「無用な細部」といった秋聲テクストにおける「外部性」が、その「通俗性」に由来する「偶然性」「出来事性」に満ちた「自然」との遭遇として焦点化される。本書の全体を俯瞰すると、ここは明らかにその他の章に比して論が浮いていると言わなければなるまい。例えば二連のテクストにおける「謎」を補填する「読者」や、『爛』における「目つき」といった言葉の頻出なども従来から指摘があるところだ。また永井聖剛が論及した、「モデル」「身辺」を書く小説の中から、こうした「自己表象テクスト」が立ち上がってくる過程と文末詞「た」と「る」の配分の問題。写生的な現場密着性を差異化した花袋と秋聲の差異など、全体にテクスト論の消化が、本書全体の印象を弱め、拡散した感を強くさせる。前者でも筆者はキーワードとして、「市場」「女性」「戦争」「労働」など多くの言葉をあげている。やや研究動向にアクセスしすぎて、それが全体の印象を曖昧にしていることは

この六章に「私」のバージョニアップ（p152）という言葉が見える。この問題が、前著『徳田秋聲の昭和 更新される「自然主義」のまさにキーワードである。評者が特に印象深く前著を読んだのは、何よりも昭和初期の文芸復興の中でカムバックする秋聲を、『仮装人物』における「新しいアリズム」との接合、すなわちジツドやプルーストとの同時代性の中で論じた点にある。心理の二重性や意識の流れのよいうな「モダニティ」の文脈からの展開は鮮やかであった。この前著の中に「フェティッシュとしての「私」（≡日本）」（p203）という興味深い指摘がある。これが本書の中でより踏み込んだ説明が聞けると期待したが、そこは充分とはいかなかったようだ。というのも、この問題が第三部における「秋聲の政治性」と関連するからである。前著の注目すべき点は、自然主義の「自己更新」を正、負両面から追跡したところにあるだろう。ここでの「新しいアリズム」は、「日本」の「後進性」の自觉からはじまって、昭和一〇年代における様々な「近代」の行き詰まりから脱する動

きとも響き合う。前著には、九章で取り上げられている「文芸懇話会」と「物故文芸家慰霊祭」についての言及も既にある。「革新官僚」松本学と秋聲の関係で言えば、とかく「抵抗作家」「右翼嫌いのリベラリスト」として、秋聲の「リアリズム」を評価する気運が強かったが、筆者は違っている。こうした「抵抗／翼賛」という二分法の起源に遡って、むしろこの「自己更新」の中にある、「モダニティ」の政治性を捉えたところに、前著の意義はあったと言っている。時代の「近衛体制」における「革新思想」と「文学革新」はリンクするという見立てである。それが『縮図』の検閲問題や、「経済小説」としての側面に新たな光を投じたことに、評者は驚かされた。その起点に先の「フェティッシュとしての「私」（≡日本）」が恐らくあるはずだ。九章で論じられるモニュメントと「戦争」や「災害」の問題は、所謂ハコモノの持つ「ナショナルリズム」として、「文学顕彰」を捉える視点は重要だ。言わば「記憶装置」としての家も、こうしたアーカイブ（記憶／保存）の持つ「政治性」として、さらに踏み込んだ議論が期待されるところだ。例え



ば、以前、評者も論じたことのある建築家・谷口吉郎の存在などは、これを象徴するものと言えよう。中津川にある「藤村記念館（記念堂）」は、彼の設計によるが、「ドイツのモダニズム建築に学んだ谷口は、「簡素」の美学を梶子に、鳥居にも似た冠木門から藤村の木像（石井鶴三作）に収斂されるような、一種の「神社」建築としてこれを具現化した。それは信州の地域おこしも連動しながら、戦後の「文学館運動」の源流となったのである。透谷の遺稿をいちはやく蒐集し、同時に自らの「生前全集」の編纂にも意欲的だった藤村は、本書にあるようにまさにアーカイブの政治性に敏感であった。こうした側面はまた、近代文学研究が立ち上がってくる昭和一〇年代と恐らく連環するにちがいないまい。

本書は「秋聲生誕一五〇年」を記念して刊行されたことが「おわりに」にも見える。徳田一穂や山田順子の作品集の刊行にも関わってきた筆者の追跡する秋聲文学の「可能性の種子」は、さらに大きく現代にまで広がっていくことを予感させる著書である。